# 上林曉全集 二

筑摩書房

上林曉全集　二

昭和四十一年二月二十日發行

著者　上林曉

發行者　竹之内静雄

發行所　筑摩書房
東京都千代田區神田小川町二ノ八
電話東京(291)七六五一(代表)
振替東京四一二三

印刷　多田印刷株式會社
製本　矢島製本株式會社

© A. Kanbayashi Printed in Japan

# 上林曉全集第二巻目次

藁草履……三
覇府……一六
馬の墓地……二七
景色……四四
竹藪の家……五三
田園通信……六四
郷土詩人……八五
海の涅槃……一〇三
神の子……一一〇
拂曉……一二九
波間……一五七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

髮……一八三
野邊送り……一九三
烏の宿……二一一
町と祖母……二二五
胞衣壺……二三一
學校……二三四
大學生……二五三
高圓寺のをばさん……二七四
換氣筒の影……二九一
安住の家……三〇〇
ちちははの記……三三〇

風前の灯……三五四
寒鮒……三七〇
離郷記……三七六
たらちね……三九一
花時……三九六
牧歌調……四〇〇
幼友達……四二〇
書誌……四三一

# 小說　二

# 藁草履

銀爺は毎日、日當りの明るい南向きの庭の、葡萄棚の下に筵を敷いて、赤い褌を出して、草履を作つてゐた。銀婆と娘のお染は、芋を擔つて、えつちらえつちら川向うの山畠からかへつて來た。もう三時の小午になつてゐた。

「爺(ぢい)、また褌出して……」

門を這入つて來るなり、婆さんは息切れのした聲でたしなめる。つづいて這入つて來たお染は噴き出してしまつて、芋の入つた重いふごをそこへ突き据ゑる。それでも銀爺は、草履から眼を離さず、そそくさと裸の膝小僧のうへへ着物の裾を引つ張り掛け、何喰はぬ顏で草履を作りつづける。婆さんはやがて庭の竈で茶を沸し始める。淡青い煙がゆるゆると立ち昇つて、明るい日影の中へ消えて行く。……

この長閑な平和な風景は、もう遠い昔、銀爺一家の或る日の風景であつた。しかし、仕事をするにも張り合ひがあつて、三人の家族の心と心が融け合つてゐたし、好人物揃ひだつたから、風景が和やかになるのは毎日のことだつた。

それは、銀爺草履の全盛期で、作る片つ端から飛ぶやうに賣れた。晩酌のよく利いた脂ぎつた顏をして、

力いつぱい引き緊めたから、よその草履の二倍も三倍も長く保つた。學校行きの子供たちが、毎朝銅錢を握つて押しかけて來た。十足も二十足も買溜める家もあつた。よその部落の子供たちも、評判を聞いたり本物を見たりして、學校のかへりにはわざわざ寄つて來て、買つて行つた。

縣道ぷちへ出しておいても、よくはけた。朝々、お染が大笊いつぱいの草履や草鞋を提げて、四五丁のところを歩いて行つた。縣道ぷちの草の上へ笊をおいて、一足一錢五厘の木札を載せ、そのそばへ竹筒を立ててかへつて來た。すると、通りすがりのお遍路さんたちが草履や草鞋を買つて、竹筒の中へお金を落し込んで行くのであつた。見てゐなくても、誰も草履や金を盗む者はなかつた。夕方になるとお染がまた出かけて行つて、空になつた笊を抱へ、竹筒の中の銅錢を財布の中へ移し込んで、かへつて來た。草履に添へて、柿や葡萄や蜜柑などを出しておくこともあつた。

道路から戻つて來ると、毎晩、子供の時からのきまりで、お染は草履の音をぱたぱたさせながら、父親の晩酌を買ひに酒屋へ走つた。子供の時には、買つてかへる途々、女だてら德利の中へ麥藁を突つ込んで、冷い酒をちゆうちゆうと吸つたこともあつた。酒屋へ毎晩通つてゐるうちに十七の娘になつて、お染は藍色のメリンスの前掛をしてゐた。それが、走る拍子に膝前でひるがへつた。

お染は髪の長い娘だつた。洗ひ髪を垂らすと、まこと裾まで屆いた。眉が濃く、頰の赤い娘だつた。指も赤くふとつてゐた。指の先で頰つぺたを押すと、そこのところだけ暫く白くなつてゐた。方々へ、絲取りに雇はれてゆくこともあつた。

夜になると、この一人娘のところへ、若者たちが大ぜい集つて來た。一杯機嫌で額をてかてかさせた銀爺は、若者たちにまじつて、若い頃の話をして皆を笑はせた。お染は母親の肩や腰を揉んでやりながら、時々母親の背中へ突つ伏して、笑ひ崩れた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「糞垂れ笑ひするもんぢやない。」と婆さんから叱られれば叱られるほど、笑ひが込み上げて來て、顏が湯上りのやうにほてつた。

遊びに來る若者の中に、隣村の啞が交つてゐて、お染の養子になりたいと言つて、動かないこともあつた。手眞似で、お染がきれいだといふのだ。時々お染を捕へようとした。摑まると、力が强くて離さないので、啞が來る度に、お染は「いやーッ」と言つて逃げかくれした。ほかの者はそれを面白がつて、啞をけしかけ、お染を困らせてはよろこぶのであつた。

家內の氣が合ひ、草履が賣れ、一人娘が娘盛りに向つて來た。これで每日の仕事が面白くなからうはずがない。若い時分九州の炭坑へ行つてゐて、捕まつたら殺される覺悟で脫出したのも遠い昔になつてしまつた。炭坑で怪我をして、左手の小指が曲つたのは、今にそのままである。銀爺は每日一足々々の草履が樂しかつた。

伊三爺はからだが頑健で、いつまでも野良仕事をやりさうに見えたが、六十五の舊正月からぷつつりと仕事をやめた。田畑のことは息子や孫に任せたが、さりとてぶらぶら遊んでゐても仕方がないから、晩酌の足しに草履作りをはじめることになつた。

伊三爺は、屋敷につづいた蜜柑畠の金柑の木の根元に、金柑の木の幹も取り入れて、小さな藁小屋を建てた。冬になつて青い葉を埋めるやうに金柑の實が熟れて黃色く輝く頃には、小屋の中は深々と藁束や藁屑に埋もれて、風一つはひらず、ほかほかと暖い。伊三爺は綿の厚い褞袍に背を圓くして、朝から晩までその中で草履を作る。藁くづの中には、味淋酒の瓶が埋めてあつて、仕事に疲れると、時々取出しては一杯舐める。縞の財布もやはりそこに埋めてあつた。嫁が飯時を知らせに來た時立つほかは、ぢつと蹲んで動かない。伊

三爺は足中(あしなか)や草鞋は作らない。紙草履（紙緒の草履）ばかりだ。

草履を作りはじめてみると、伊三爺の人氣は素晴らしかつた。伊三爺の家と銀爺の家は部落の上(かみ)にあつて、すぐ近所であつたが、銅錢を握つた子供たちは、朝毎に伊三爺の家の方へ移動して行つた。伊三爺の草履は、器用で、體裁がよくて強かつた。銀爺の草履は、どこと言つて惡いところはなかつたが、取り立てて良いところもなかつた。平凡、常識的だつたのだ。誰もさうだと思つてはゐなかつたが、伊三爺の草履が現はれてみて、はじめて判つたのだ。先づ藁の吟味、藁の濕(しめ)し工合、藁の打ち工合、作り方、鼻緒の立て方——伊三爺の草履には、隅々まで細い心遣ひが行きわたつてゐた。それに草履を作つてゐる時の心の打ち込み方！伊三爺は名人氣質で、手を休めては、首を右に傾け左に傾け、細かく毛をむしり、出來上つて行く草履の形を整へるのであつた。財布に金が溜つて行くことや、晩酌にありつくことなどは考へず、唯良い草履を作ることで心がいつぱいになるらしかつた。さうして出來上つた草履が、體裁がよくつて、長く保つ。子供達は伊三爺の草履を買ふと、香の高い新藁の草履の裏に水を含んで吐きかけたり、濕地で濕らせたりしたあと、勇み立つて踏みしめた。

學校が退けると、子供たちはまた伊三爺の小屋へ押しかけた。伊三爺は昔話が上手なのだ。鬢打獨樂(びんちやうこま)を持つた子供、根ッ木を提げた子供、砂糖黍を嚙る子供、芋の切り干しで懷(ふところ)を膨らませた子供達が、伊三爺を取り卷く。しかし、伊三爺は一寸のことでは話し出さない。

「爺(じい)やん、話一つ聞かして呉れた。」とせがむ。

「こなひだ話したぢやないか。また今度の次ぎにしよう。」と取り合はない。

「たつた一つでええけん。もうこれつきり話して呉れと言はん。最後に一つ。」などと大勢聲を揃へてせがんでゐると、やをら手に唾をつけ、草履はそつち除けにして話し出す。

伊三爺は山中鹿之助や岩見重太郎や笹野權三郎などの話が得意であつた。連續講談式に毎日一區切りづつ話した。話をクライマックスのところで切つておきながら、樂しみにして翌る日來て見ると、なかなか話さないのが伊三爺らしい。興に乘つて來ると、痘痕の顏を歪め、黃色い缺けた齒をむき出し、所作をしながら語る。伊三爺の話を聞いた子供達も、今はもうすつかり大人になつてしまつたが、彼等も子供の時のことを思ひ出す度に、伊三爺が神懸りしたやうな形相をして、安珍清姫の執念を、さながらに話した時のことなど覺えてゐるにちがひない。

伊三爺はまた、子供達に、日本古來の勇婦の名も敎へ込んだ。一に板額、二に巴、三に更科、四に銅山のお弓婆だ。村の銅山口に住んでゐるお弓婆は、二三年前夫婦喧嘩をして、亭主を一時讃岐の多度津まで追ひ出してゐた豪の者だ。

「一に板額、二に巴、三に更科、四に銅山のお弓婆。」

子供達は、伊三爺の話を聞き終ると、口々にさう節をつけて叫びながら、退散して行つた。

伊三爺は、銀爺を追ひ越して、完全に子供達の人氣者になつてしまつた。

彌太爺は彌太婆と二人で流れて來た旅の者であつた。村に落ちつくと、小使ひになつて、稅金の切符を配つたり、寄り合ひを知らせる法螺貝を吹いて歩いた。

その彌太爺も、伊三爺と前後して、仕事の合ひ間合ひ間に藁草履を作る渡世を始めた。彌太爺の前生は料理屋か何か粹な筋らしかつた。だから草履作りはづぶの素人だつた。見樣見眞似で、しかも不細工な草履を作つた。

彌太爺のところには子供達は集まらなかつた。その代り、病身でごろごろしてゐる男や閑人などが寄り集

つて來て、草履を作る彌太爺相手に無駄話をした。彌太爺は目白を二羽飼つてゐたので、目白友達の老人達もやつて來た。彌太爺は下手な口笛を吹きながら、視力の薄れた眼を籠に近づけて、腹毛の焦け工合をと見かう見した。町の目白寄せにはいつも持つて行くので、丹誠を籠めてゐた。それを、集つて來る閑人どもが冷かした。

「まあ見ちょッてくれ。一等になるこた判つちょる。」彌太爺は自信たつぷりな應酬をして、皆を笑はせた。なるほど、朝、青い菜つ葉を取つて來て摺り餌を拵へてゐる彌太爺の姿は、なかなか無心であつた。

寄せの朝、彌太爺は祕藏の目白を大風呂敷に包んで背中に負ひ、近所の目白友達を誘ひ合はせて町へ行つた。けれども、村から行つた目白は一羽も選に入らなかつた。みんなで飲食店で酒を飲んで醉つ拂つてかへつて來た。

すると、小柄で瘠せつぽちだが、どこか向う意氣の強い彌太婆から、小つぴどく叱られた。

「目白鳴かす暇があつたら、草履の一足でも作れ。」

「おらが好きですること、喙出すな。」

「そんな馬鹿目白、飛ばせ飛ばせ。」彌太婆は籠の中の目白を掴み殺さうとする權幕だつた。

彌太爺は恐れ入つた風で、翌る日から又草履に精出した。選には入らなかつたが、やつぱりいい目白だと思ひながら、時時手を休めては、口笛を吹くことを忘れなかつた。首を傾けて待つてゐると、目白の聲がかへつて來た。すると滿足して、また思ひ出したやうに草履を作りつづけた。

彌太爺の草履もかなり賣れた。家は村のまん中にあつて便利がよかつたし、それに何より、老人夫婦の寄る邊ない姿が村人たちの同情を惹いて、草履は間斷なく賣り捌けた。だから夕方になると、彌太爺はたいした元氣で、片肌脫ぎで、手槌の音高く、明日の藁を打つのであつた。

銀爺は頽勢を挽回しようと焦つてゐたが駄目だつた。子供たちの人氣は伊三爺のところに集つたし、人情は彌太爺に注がれた。よその草履が賣り切れになつてゐるときだけしか、小さなお客さんたちは銀爺のところへ寄りつかなかつた。仕方がないので、婆さんとお染が爺さんの作つた草履を籠に入れて、家々を廻つて賣り歩いた。だが、義理でしか買つて呉れなかつた。

銀爺一家は、葡萄棚のあつた地所を地主に返し、竹藪の蔭の茅屋が空いてゐたので、そこへ移つた。銀爺は眼がよかつたので渡世を更へ、今度は投網を編んだり繕つたりする仕事を始めた。お染は町の料理屋へ女中に雇はれて行つて、銀杏返しに結つた。

銀爺が敗退すると、自然、伊三爺と彌太爺の競爭といふ形となつた。併しこれは、ほんの形だけのことで、事實は競爭でもなんでもなかつた。最初から競爭にならなかつた。伊三爺は、村の草履作りの年代記中では恐らく不世出の名人だつたし、彌太爺は名題の下手糞だつた。伊三爺の人氣は壓倒的だし、云はば彌太爺はおこぼれを拾つてゐるに過ぎなかつた。

遠足とか運動會とか、そんな時には前から賴んでおかなくては、伊三爺の草履は手に入らない。止むを得ず彌太爺の草履を穿いて行くと、意地の惡い奴が尋ねる。

「お前ん草履はどこ製ぞ？」

「彌太爺。」

「なあーんだ、彌太草履か！」と輕蔑する。そして、もう一人に尋ねる。「お前は？」

「伊三爺。」答へる子供は得意さうに足を踏み出して、見せる。

彌太爺は稽古を積んだが、手は上らなかつた。素人だから下手だと思つてゐたら、生れつき不器用な男な

ので、腕や脚の骨つ節が太く、馬鹿力が強く、藁のひげをむしつたりする時は仕事が細かさうに見えて、如何にも熱心だつたが、出來上つたものは何んとしても拙かつた。力を籠めれば籠めるほど拙いものが出來上つた。形が惡いから、長保ちしなかつた。

彌太爺は一所懸命で下手糞な草履を作つた。それが又同情を惹いてゐたが、案外早くからだが參つて、眼も駄目になるし、草履を引き緊める力も衰へて、ますます下手糞な草履が出來上つた。隨分しんが弱つてゐたと見えて、或る晩酒屋へ行つて冷酒を呷つてかへつて來ると、胸が惡くなつて、翌る日の朝ころりと死んでしまつた。彌太婆は彌太爺の胸に顏を押し當てて、あたりかまはず聲を張り上げて泣いた。あまり仲の好い夫婦ではなかつたが、連れ合ひに死に別れてみると、彌太婆の姿は、番ひの一羽に死なれた小鳥のやうに孤獨でひつそりしてゐた。それ以來、彌太婆は顏が引き釣つて、口が歪んだ。

その頃、彌太婆のゐた家が、北海道からかへつて來た家主に取り上げられたので、彌太婆は村端れの墓場のそばに掘立小屋を建ててもらつて、そこに住んだ。ただ食事をさせてもらふだけで、近所の子守をした。ぎすぎすしてゐて子供を叱つたから、子守に雇つて呉れる人もだんだんなくなつて行つた。

それから彌太婆は、刈田のあとをさまよふやうになつた。落穗を拾ひ集めたり、田螺を拾つて來て賣つたり、蟹を捕つて來て蟹味噌を拵へたりして、暮した。刈田には、何かしら暮しの足しになるものが轉つてゐるやうな氣がした。彌太婆はその獲物を探すために、毎日出かけていつた。

しかし彌太婆は、毎日刈田へ出かけてゐるうちに、いつの間にかもう落穗を拾つたり、田螺を拾つたり、蟹を捕つたりしなくなつた。ただ無暗に刈田の中をさまようてゐた。氣が變になつてきたのだ。素足にずたずたに裂けた襤褸を着て、枯野に降りた痩せ鴉のやうにさまようてゐた。

たうとう最後に、小屋の中に寢込んでしまつて、「廻り養ひ」になることになつた。「廻り養ひ」といふの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com